バングラデシュ

貧しい人を救いたい 母国で病院開設

元日本留学の医師3人 日本からも援助

来月から 無料診療日も

世界最貧国のひとつ、バングラデシュで、日本に留学経験を持つバングラデシュ人医師三人が来月、貧しい人たちのための病院を開設する。日本で学んだ医療技術を自国の発展につなげようと、今年春の帰国前から準備を進め「アジア医師連絡協議会」（AMDA、事務局・岡山市）の支援も得て実現にこぎつけた。週に一度は無料診療日を設ける予定。人口の大半が一生に一度も医者にかからないといわれるこの国で「この病院を成功させて、だれでも治療を受けられるためのステップにしたい」と三人は張り切っている。

（社会部・三野　雅弘）

三人は、AMDAバングラデシュ代表のサルダール・ナイームさん(三二)とムアザン・ファイサルさん(三四)、ジョナイド・シャフィックさん(三三)。

三人は約五年前に、最新の医療技術を学ぶために来日、それぞれ東京大、九州大、琉球大で消化器系外科、麻酔科を専攻してきた。

バングラデシュの海外留学生は、大半が医師としての活動の場を求めて欧米に流出する。しかし、ナイームさんらは「学んだ医療技術を自国の発展のために生かしたい」と博士課程を修了した今年春に帰国、それぞれ病院に勤めながら、貧しい人のための病院の開設準備を続けていた。

AMDA日本支部もこの趣旨に賛同。日本で使わなくなった医療機材などを送ると同時に、菅波茂代表(四六)も資金面の援助をした。

来月スタートする病院はダッカ・グルシャン地区の住宅地に決まり、「日本バングラデシュ友好病院」と名づけられた。三階建ての会社事務所だったのを借り受け、現在病院用に急ピッチで改築が進んでいる。

病院では、ナイームさんらが診療、がんなどの早期発見のための定期検診なども行う。毎週金曜日は無料診療日とし、貧しい人たちにも利用してもらう。ベッドは三十床。急患に対応するため、二十四時間体制で交代で病院に詰める。開院までに医師十五人などのスタッフをそろえる予定だ。

ナイームさんは、「この国の六五%の人は一生に一度も医者にかからないというデータもある。早期治療のためにも、お金が無い人でも気軽に来れる病院を目指したい」と意欲を見せている。

「日本バングラデシュ友好病院」のスタートを心待ちにするナイームさん（右）ら＝バングラデシュ・ダッカで